

学校経営のポイント

草村礼子さん“あったかく生きる”講演

若井 彌一

7月1日、筆者の勤務（併任）する上越教育大学附属小学校に、女優の草村礼子さんをお招きし、上記の演題でご講演をいただいた。

ご自身の、貧しいながらもひたむきに生きた少女時代、女優となってから現在までの自分史を織りまぜての示唆に富む講演で、涙ぐんだり、かみしめるような表情で熱心に耳を傾ける参加者（多くは教育関係者）の姿が印象的であった。

参加者だけの“いい話”ではもったいない気がするので、要旨をお伝えすることにする次第である。

“一言の重み”

東京で生まれた草村さんは、9歳にして父を病気で失った。その後は、看護の職に就いていた母を支え、きょうだいに対して「母親代わり」の意識で、家事（家計簿付けを含む）に力を注いだという。

自分にとっては一張羅の晴れ着で、3年続けて親戚の家を正月訪問（新年の挨拶）した際に、親切のつもりで言われた「正月には、晴れ着を着て挨拶に出向くものだよ」という一言が、彼女にとってどんなに切ないものであったか。その切なさを胸にしまっ、のちにそのことを打ち明けて、ともに泣いたという語りの脈絡は、「一言の重み」を強烈に印象づけた。

そんな悲しい体験もあったけれども、ふり返れば、知人・仲間・ファンの皆さんに励まされることが多く、その励ましが女優としての自分を磨き、向上しようとする意欲を支えてくれたという。

講演内容のクライマックスは、映画「Shall we dance?」の周防正行監督が、“たま子”先生役を演じる彼女に、「あなたは、自然に、ただそこに居るだけでいい」と、彼女の存在感を、彼女にとっては

「これ以上の幸せはない」というような表現で評してくれたというくだりである。

厳しいオーディションをくぐり抜けて抜擢され、緊張しすぎて肩に力が入る彼女にとって、監督のこの言葉は何にもまして癒しとなり、励ましとなったという。「一言の重み」である。

“相手の心に快く響く”話しかけを

草村さんは、講演の前日、6月30日に公開授業の一部を参観された。その参観をふまえて、子どもたちが熱心に学習活動に浸っている様子を説明したあとで、教師の話し方についての感想を述べられた。

授業中は比較的ていねいな言葉で語りかけているけれども、授業が終わってからの教師同士の会話の印象は必ずしも良くなかった、という。それは、「相手の心に快く響くような話し方」という点で足りないところがあったからとの指摘であった。

「相手の耳に届きさえすればよい」というような、「思いが込められていない語り」では人の心を動かすことはできない、というのが、草村さんの参観者に伝えたいポイント（核心）ではなかったか。

学習者（子ども）の学びへの意欲を支え、後押しするような、教師としての思いを込めた語りかけ・話しかけに努めてほしい、との女優の思いを込めた“あったかい語り”に、1時間半余りに及んだ講演が短すぎるように感じられたひとときであった。

（わかい・やいち＝上越教育大学教授・附属小学校校長併任）

■05 夏季教育管理職研修会のお知らせ■

日時：7月30日（土）/31日（日）/8月1日（月）

場所：東京・お茶の水・総評会館

受講料：『教職研修』定期購読者 22,000 円

...詳細は、『教職研修』7月号をご参照ください。

●新刊案内● 好評発売中！ 尾木直樹【編】A5判 225頁・定価 1995円 教育開発研究所刊

保護者の無理難題に担任教師が困っていたら、校長先生、あなたの出番です！

校長・教頭のための困った親への対処法！

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料 FAX 0120-462-488 をご利用ください（24時間受付・即日発送）